



～本物の金沢文化との出会い～
「新しい金沢の価値の創造を目指して」

かなざわ燈涼会

金沢にまた一つ観光資源が誕生

加賀百万石の城下町として発展した金沢は、多くの歴史的な史跡やまちなみ、伝統工芸が残るまちです。また、歴代の藩主が茶道や能などに力を入れたおかげで、武家と町民の両方に文化が息づいています。

多くの地域資源が息づく金沢に、昨年一つのまちづくり事業が誕生いたしました。それが「かなざわ燈涼会」です。金沢JCの月輪室長によると、歴史的なまちなみが残るエリアを中心として、市民が自分たちのまちを再認識し、その良さを対外に発信する事業として誕生したものです。伝統工芸や文化、芸能、食、美しいまちなみなど、金沢の豊富な地域資源を組み合わせ、世界から集客できる観光ソフトとして発展させることを目指しています。

2年目を迎える今年の「かなざわ燈涼会」は、7月29日(金)から31日(日)までの3日間の日程で開催されました。

金沢の底力を感じさせるコンテンツたち

金沢の文化人が監修した文化コンテンツとしては、金沢らしい町家が広がるまちなみと工芸を組み合わせ、新しいかなざわ街路空間を表現した「浅野川工芸回廊」が開催されました。金沢21世紀美術館の秋元館長の監修のもとでは、金沢が誇る匠達5人の工芸作品と、食文化とのコラボレーションにより、極上の時空間を楽しんでいただく「趣膳食彩」も開催されました。

界隈の神社の境内では、日本の伝統

音楽と西洋音楽のコラボレーションによる「浅野川コンサート」が開催されました。さらに金沢工業大学の学生たちの制作したオブジェとライトアップで幻想的なまちなみを創出する「浅野川月見光路」が、コンサートに彩りを添えていました。これら4つの文化コンテンツは、まさに金沢の新しい価値の創造に繋がっていく取り組みと感じられました。

学生と地域住民による協働創出型文化コンテンツとしては、ひがし茶屋街の町家を燈籠に見立てた事業「町家燈籠」を展開。伝統的な町家とデジタル技術を融合させて加賀五彩を表現した映像を映し出し、古都のまちなみを歩く私たちの目を楽しませてくれました。学生が主体となって運営していた「川床カフェうさぎ茶房」も昼間利用されない川床を活用して夏の風情を感じさせてくれていました。

また、「観光アプリ浅の川散歩」「浅の川ツイッター部」などモバイルを使用して簡単に情報を得られるサービスも充実しており、今までのまちづくりイベントではあまり見られない、運営に学生のアイデアが生かされていたことも印象的でした。



「浅野川工芸回廊」
伝統工芸品が歴史あるまちなみの中に溶け込み、まち全体がギャラリーとなりました。

さらに、学生によるミニライブ「学都コンサート」、加賀藩に伝わる昔からの七夕の行事を再現した「昔七夕」、会期中にも子どもたちに昔ながらの遊びを体験してもらう昔あそび事業なども開催されました。

波及効果は「観光」だけにとどまらず…

金沢JCではこれまでも学生とともに事業を展開してきた経験を活かして、この協働創出型文化コンテンツという、より大きな枠組みにチャレンジしました。金沢JCメンバーが学生の主体性を引き出し、地域の方の理解を得ることに苦心されたようですが、今回の開催状況を見るとこれまでに地域で積み重ねてきた努力が実ったものだと感じる事ができました。

この「かなざわ燈涼会」を通じて、金沢の人々が自らのまちの文化がもつ力を再認識されていること、また新しいコミュニティが育まれていることを感じます。開催2年目の今年、事業の広がりは新たな交流を生み、まちの活性化に繋がっています。そして、観光ソフトとしても、「かなざわ燈涼会」の集客力は大きな成果を上げつつあります。

文化のまちで育まれた新しい取り組みが、伝統工芸の振興や観光ソフトとしての成果にとどまらず、コミュニティの拡大やまちづくりに関心をもつ若者の育成などを通じて文化力を高め、地域に誇りを復活させていくプロセスに、これからも目が離せません。

「地域の誇り」復活推進会議



「趣膳食彩」
金沢の食文化と現代の匠の技が融合、極上の食空間を演出。



「浅野川月見光路」
浅野川コンサートの会場となった宇多須神社が、金沢工業大学の学生たちにより幻想的な空間に。



「町家燈籠」
学生たちの感性と表現力で金沢が学生のまちであることを再認識させてくれます。



「浅野川コンサート」
美しい音色を響かせてくれた演奏者たち。